

飯島一雄先生の思いで

山根 正気*

札幌郊外にある三角山で1958年春に採集した蛾をあとになって調べてみると、当時採集例がほとんどなかったシベチャキリガという珍しい種でした。1962年に日本鱗翅学会・緒方正美先生のご紹介で「蝶と蛾」13巻2号にこの記録を掲載したところ、標茶町の飯島先生から1963年3月29日づけで激励のお葉書が届きました。これが飯島先生との出会いであり、また標茶とのご縁の始まりでした。私は中学3年生になる直前でした。それから大学に進学するまでのおよそ4年間にいただいた手紙は59通（葉書37通、封書22通）に達しました。私の方からもほぼ同数のお手紙をさしあげたはずですが、先生からのお手紙の内容は蛾の採集・標本作製法、分布情報、近縁種の区別法、幼虫の飼育法、報文の書き方など、懇切丁寧なものでした（図）。時には数枚の便箋に細かい字がぎっしり詰まっていたこともあります。それ以外に小包で標本を頻繁に交換していましたが、その数は記録していません。おかげで北海道の蛾についての知識は短期間に飛躍的に増えました。大学卒業後は手紙の交換は減りましたが、先生が書かれた報文の別刷りは必ず送ってくださりました。

今では時効と判断されるややあぶないエピソードを紹介しましょう。蛾の採集に使う毒ビンには、翅の斑紋や体の毛にダメージを与えない、即効性のある青酸カリを使うのがベストです。1964年6月9日のお手紙には「毒ビンの薬品は学生の内は四塩化炭素が割合安全なんです、理想的ではございません。青酸加里が一番いいのですが、3-4本でしたらお送りください。薬品（青酸加里）

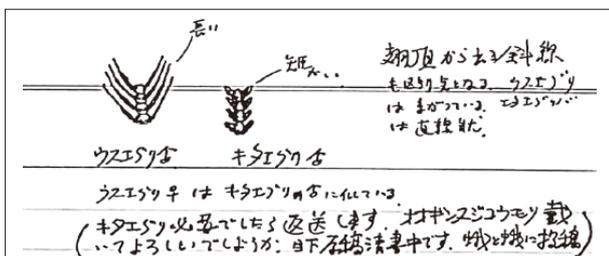


図 手紙の一部（1964年12月6日付け）



写真 標茶町の飯島先生のお家で（2009年8月28日）

をつめて差し上げます.. しかし御両親に相談して、おゆるしを得てください」と書かれていました。青酸カリ入りの毒ビンは7月10日過ぎに届いたと思います。また12月6日には「毒ビン来シーズンまで安全な場所へ保存するよう.. 来春又くすり入れ替えてあげませう」とありました。高校1年生に青酸カリを普通小包で送りつけるなど現在ではとても考えられません。

手紙での長いおつきあいがあったにも関わらず、お会いしたのは2009年の8月になってからでした（写真）。釧路市立博物館で飯島先生の標本の展示があるというニュースに接して、この機会を逃したらもうお会いできないかもしれないと考え、急遽釧路行きを決めました。8月27日釧路着、翌28日昆虫展を見学したあと、小雨のなか標茶町に向かい先生のお宅に伺いました。感激の初対面をするまでに、最初のお葉書をいただいてからなんと46年が経過していました。30日には先生の強いご希望で標高799mの西別岳に登りました。山頂には到達しませんでした、80歳にならんとする先生の健脚ぶりには驚きました。嬉しいことに、この時に採集したアリの記録を先生と土屋慶丞さんが報文にしてくださいました。飯島一雄先生は在野の研究者で、ほとんど独学で昆虫学や考古学等を修められました。私にとっては最初の昆虫学の師匠であり、先生にとって私は最も長い期間にわたる弟子だったといえます。ここに謹んで先生のご冥福をお祈りします。

* 鹿児島大学名誉教授